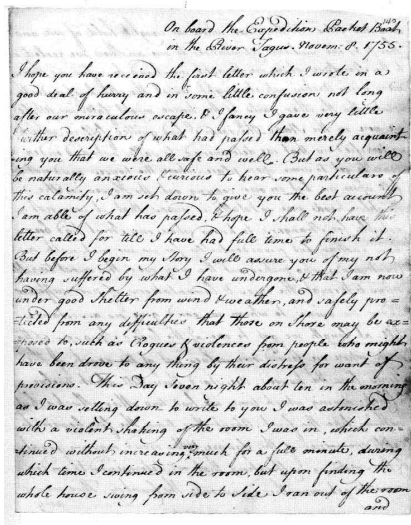


研究二ノ三 在留イギリス貴紳とリスボン大地震

第二節 ドラムランリツヒ伯爵とクインズベリー公爵夫妻

- 一、クインズベリー公爵夫妻とその子息
- 二、ドラムランリツヒ伯爵とリスボン大地震
- 三、大地震以後のクインズベリー公爵夫妻



ドラムランリツヒ伯爵の一七五五年十一月八日付実父クインズベリー公爵宛書簡（病身の彼には屋外での就寝が耐え得ぬため、リスボン港に停泊する定期船に避難し、連泊する船室で綴られた。）

第二節 ドラムランリツヒ伯爵とクインズベリー公爵夫妻

一、クインズベリー公爵夫妻とその子息

気候温暖なリスボンへ療養に来たイギリス貴族、ドラムランリツヒ伯爵チャールズ・ダグラスは。十一月一日高台バルト・アイロの医家待合室で最初の震動に襲われた。被災したチャールズ・ダグラスは、スコットランド屈指の名門、クインズベリー公爵夫妻の次男である。十四世紀スコットランド独立の志士、ジェイムズ・ダグラスの家系を継いで、クインズベリー公爵はハノーファー王朝の国王侍従や枢密顧問官を歴任した。他方チャールズの実母クインズベリー公爵夫人カトリーヌは、十八世紀イギリスの著名な貴婦人であり、文学者のジョン・スウィフトやジョン・ゲイのバトロンとして知られる。

社交界に輝く実母、ハイデ伯爵夫人ジェーンに育てられ、十六歳で学芸サロンにデビューしたカトリーヌ（愛称キティ）は、親譲りの美貌と闊達な挙措によって注目を惹いた。フランス駐在大使の経歴を有する詩人マシュー・ブレイアーは、この社交界デビューを有名な叙事詩『ザ・フイメール・ファエトン』で歌う。以後ポウブからウォルポールに至るまで数々の詩人が彼女に讚美の韻文を捧げた。①

① Catherine, Duchess of Queensberry, in Harry Graham, *A Group of Scottish Women*, New York, 1908.

pp.145-146.

一七二〇年カトリーヌは従兄弟であるクインズベリー公爵と結婚し、以後エジンバラの同公爵邸とダンフリーのドラムランリツヒ城へは作曲家ヘンデル、詩人のプライアーとポウブ、建築家ウィリアム・ケント、画家チャールズ・ジェルヴァス、さらにはスウィフトとゲイなども招かれた。こうした環境にありながら公爵夫人カトリーヌは、上流社会の豪華や虚飾を嫌って、正装や宝石を減多に纏わず、平素はスコットランド農婦の身なりで過ごした。王宮へも普段着で出仕し、ときには前掛けを締めたとされる。

一七二八年ジョン・ゲイの画期的な諷刺劇『乞食オペラ』がロンドンで上演され、空前のロングラン、六三夜の大成功を収める。しかし、これに自信を得たゲイの自作『ポリイ』は、政治的な誹謗として王権から出版と上演を禁止された。このときクインズベリー公爵夫人カトリーヌが、弾圧された文学者を擁護して、国王ジョージ二世に抗議し、返礼として宮廷から追放される。余波をうけてクインズベリー公爵もまた宮廷の要職を辞任した。十八世紀貴族社会の貴重な史料、メアリー・デラニーの『自伝・書簡』には、これなる追放処分が同情と慨嘆をもって記録され、ジョージ二世に向けたカトリーヌの捧答も伝えられる。著者デラニーは著名な知的女性サロン、ブルー・ストッキング・サークルに属して、異色の手芸家としても知られ、公爵夫人と娘時代からの親友であった。デラニーの書簡で追放にいての記述は、王宮での舞踏家に出席し、休憩に入った場面から始まる。

金剛石のボタンで飾られた紺色のビロードで国王は臨席されました。宮廷の喪が当日明けたばかりで、王妃が召されたのは黒のビロードです。金糸で刺繍された縞模様の絹織物が第一王女の装いでした。(中略)
慎みない女と思われるでしょうが、そのとき私の背後で囁かれた言葉をお聴きください。だれしも驚愕したことに、尊敬すべきクインズベリー公爵夫人が宮廷から追い出された、と……。ゲイの『乞食オペラ』

続編が政治的な誹謗として禁止され、公爵夫人は文学者への処分取消を求めただけであるのに……。彼女はゲイの親友であって、深く傷ついたことに同情しました。貧しいゲイに打撃から立ち直らせるため、作品を出版できるよう配慮したのです。勇敢にも彼を擁護して国王と王妃に謁見室で取消を求め、その結果公爵夫人は（宮廷から追放されました）。これほど高位の貴顕には前例のない処分でございます。宮廷式部官が王命を届け、彼女は捧答を誌しました。それをここに添付します。（原註）

（原註）

追放処分に対するクインズベリー公爵夫人の捧答

私ことクインズベリー公爵夫人は、宮廷から退去せよとのご命令に畏怖し、これを甘受致します。平素宮廷へ参りましたのは、けっして遊興のためではなく、国王・王妃両陛下に敬意を捧げるためであります。先例のない王命を拝して憂慮するのは、敢て真実を見極め、語る人材がこれなる宮廷に払底することであります。いまだゲイの作品を読んでおらぬ、と両陛下は言われるので、戯曲に籠められた真実と誠意を擁護することが、最高の忠誠と思案したにすぎません。自己の矜持と知己の名誉を護らず、真実と理性に背く（宰相）グレイス・オブ・グラフトンに従わず、私自身の主張を一途に貫いた次第でございます。

クインズベリー公爵夫人

メアリー・デラニー著『自伝・書簡』第一巻（一八六一年） ①

① Mary Granville, Mrs. Delany, *The Autobiography and Correspondance*, London, 1861. volume 1, pp.193-194.

イギリス演劇史における画期的な作品、ジョン・ゲイの戯曲『乞食オペラ』は一七二七年リンカンズ・イン・フィールズ劇場で初演され、六十余回の長期興行を記録した。その内容はロンドンの犯罪世界であって、盗賊や乞食や娼婦を登場させる。彼らの言辞を借りてそこには政治風刺が込められ、立憲君主制を確立した宰相、ウオルポールの金権政治を痛烈に批判したとされる。

ジョン・ゲイ著『乞食オペラ』

第一幕 第一歌

いかなる稼業も、昨日の敵は今日の友、

淫売と悪党が夫婦を装う。

いかなる商売も欺し合い、

神父は法律家を山師と呼び、

法律家も聖職者をこきおろす。

正業を営むと俺らが言うのと同じく、

お偉い政治家は高潔な天職と誇る。

第二幕第二九歌

世相を嘆くときには、
用心深く賢明であれ！
宮人を激怒させぬように。
悪行や賄賂を指摘すれば、
奴ら全員に当てはまる。
余を標的にした、と
みな喚く。

第二幕第三三歌

役所へ決済に行くときには
心づけを忘れぬように！
役人に速く処理させるには、
袖の下に頼るほかない。
貴婦人の不興を癒すにも、
特効薬はこれ、
心づけに笑顔が戻る。
万事に通じる理法と思え！

第二幕第六七歌

法のもとでは万人が平等、
俺のみならず、だれをも縛る。
なぜ俺だけが処刑場に送られるのか。
黄金の力が法の網を潜らせる。
富者をも縛り首にすれば、
国政は枯渇し、
処刑場が満杯になる。

①

そもそも日本の喜劇に政治笑話（ジョーク）の伝統がないのを指摘し、かのロッキード事件の最中でさえ、政治諷刺を籠めた番組や舞台が皆無に近いのを嘆いたのは、脚本家の飯沢匡である。② 現代よりも遙かに厳しい状況にある十八世紀のイギリスでこうした戯曲を執筆したゲイとこれを擁護したキティの気概には感服せざるを

① John Gay, *The Beggar's Opera*, London 1921. pp.1, 46, 50, 88.

〈参照〉ジョン・ゲイ著、海保真夫訳『乞食オペラ』法政大学出版局、二〇〇六年。一一、七八―七九、八四、一三五―一三六頁。

② 飯沢匡著『武器としての笑い』岩波書店、一九七七年。二―十四頁。

えない。

失意のゲイはクインズベリー公爵のもとに庇護され、経済的な援助や病苦への介抱も受ける。また、親密な友人として公爵夫人の要務を補佐するとともに、邸内の小劇場で客人にしばしば芝居を披露した。晩年の静穏なゲイと公爵一家との交遊について一彼の静穏な晩年と公爵の一家についてヘンリー・アーヴィングによる評伝はつぎのように伝える。

ソールズベリーの平原でしばしばゲイは、乗馬やウズラ撃ちに出かけた。ときには公爵夫人の縫いものを手伝いかけたり、母牛の乳搾りや絵画の制作に手を染める彼女を面白がった。ふたりの子どもを完全に自分の召使にし、彼らと遊ぶのにゲイは多くの時間を費やした。

ヘンリー・アーヴィング著『評伝 ジョン・ゲイ』（一九六二年） ①

こうして隠栖の日々に耐えつつゲイは、無二の親友のジョン・ハン・スウィフトと文通を重ねた。この時期における両者の通信を辿ると、一方からは三種の書簡、すなわちゲイ自身、クインズベリー公爵、同侯爵夫人の各々がつねに同封され、他方からはスウィフト執筆による三種の返書、すなわちゲイ宛、公爵宛、公爵夫人宛の各々が送付された。膨大な『スウィフト書簡集』のなかでもこれら四者の交信は心温まる要素であるが、語られる内容としては、文学者の経済的困窮と彼らへの支援が相当の部分占める。一七三二年にゲイが世を去ると、深

① Willia Henry Irving, *John Gay, Favorite of the Wit*, New York, 1962. p.280.

い悲しみをもって邸内に碑石が建立され、荘重な葬儀が営まれた。まもなく公爵夫人カトリーヌは単独でスウィフト宛の書簡を綴り、その前半をここに訳出する。

クインズベリー公爵夫人カトリーヌ 一七三二年二月二日スウィフト宛書簡

拝啓。私たちの友ゲイ様が逝去され、なにを置いてもまず先生にお手紙したく思いました。しかし、悲痛な心境を誘発するのを怖れし、それを差し控えたところ、ゲイ様に宛てた先生の書簡をポウブ様から見せて頂き、以前のようにお便りする気持を取り戻しました。お褒めくださるような長所が私にあるとすれば、ほかならずこうした文通によって得られました。真の学者と思われる無二の人物、それがゲイ様でございます。私になんらかの取柄があるとすれば、子どもが外国語を逐一習うように、すべてこれなる久しき友から学びました。彼を失ったことは、私にとって測り知れぬ損失です。こうした友を持ち得た幸運は、終生私の脳裡から消えません。

ゲイ様はあまりにも世間に通曉し、未練なく世を去られたと存じます。あの方に対して世間はあまりに頑迷で、然るべき評価を逸したと存じます。先生のご実績をゲイ様は、きわめて真摯で完璧なものと呼讃されてきました。これをお伝えすることが、私の責務でございます。こうした讃辞から私も認識を新たにしました。世事に関して先生がお困りの節は、従来ゲイ様に依頼されたように、なにとぞ私へお申し付けください。不可欠な要件についてつねにお役に立てるように、と念願しております。①

① Jonathan Swift, *The Correspondance*, volume IV, pp.398-399.

公爵夫人の書簡は敬愛するゲイへの哀悼を表すとともに、文学者スウィフトへ格別の理解と支援を確約するものであった。質朴で温和なゲイが人々に親しまれる一方、気難しく狷介な後者はともすれば敬遠されたからである。一七二六年『ガリバー旅行記』の刊行によって不朽の名声を得たスウィフトであるが、晩年を悲惨にする精神的疾患がつとにこの時期彼に忍び寄っていた。

ゲイが歿して十五年後、ようやく一七四七年にクインズベリー公爵夫人が追放処分を解除され、夫君と共に宮廷に復帰した。変わらぬ彼女は翌々年カンバーランド公爵邸における国王臨席の宴会で、白頭巾と前掛けを付け、地味な服装で現れたと記録される。

クインズベリー公爵夫妻の長男ヘンリーは軍人の道を選び、オーストリア継承戦争のため出征した。一七四四年アルプスの麓クローネオ包圍戦において、彼はサルデニア王国シャルル・エマヌエル三世の戦列に加わり、フランスとスペイン連合軍撃破の戦功を彰された。やがてドラムランリツヒ伯爵として豪壮な古城と広大な領地を相続したヘンリーは、一七五四年ホープトウン伯爵の令嬢エリザベス・ホープと結婚するが、国内での旅行中に不慮の死を遂げた。^①

デラニー夫人 一七五四年十月二五日付デヴェス夫人様書簡

^① Graham, *op. cit.*, pp. 138-139, 147.

Mary Wortley Montagu, *The Letters and Works*, London, 1837, volume III, pp. 108-109.

ブルストローデ、一七五四年十月二五日

デヴェス夫人様

ドラムランリツヒ伯爵の死について噂を耳にされたか、新聞の記事を読まれたと存じます。なにが起こったか、いまは詳しく申せません。自身を拳銃による自殺と最初報じられました。しかし、信じ難い事柄です。伯爵は闊達な青年であり、意中の人と結婚したばかりで、快適な新居も用意されました。スコットランドから訪れたクインズベリー公爵夫妻が、新妻とご一緒でした。新聞の報道によれば、乗馬したドラムランリツヒ伯爵は、カラスを狙撃すべく拳銃を取り出し、騎馬の躰きに揺られて、わが身に発射したとの由。このような情況が真実であるとすれば、自殺ではなく、事故と言うべきでしょう。伯爵はつねに情愛篤く、凄惨な最期によって近親の方々を、絶望させることなどありません。

昨夜お訪ねしたポートランド公爵夫人は、この惨事について黙しておられました。脳裡には深く刻まれているはずです。不幸な公爵夫人をまず慰めねばなりません。こうした苦難に耐える精神的な支えが、彼女に欠けることを憂慮します。神の慈愛はかかる試練によって公爵夫人が目覚め、思慮深き正道に導かれます。清遊や趣向が苦しみを紛わすとともに、神意への完全な服従、染みついた短所の謙虚な自覚によってのみ、慰藉が得られることを、悲運なる人は悟るでしょう。まさしく彼女が真の慰藉に達することを、切に私は望みます。クインズベリー公爵に聞しては、冷静な人物であり、自若とされるでしょう。もとより彼も衝撃を受けたでしょうが、これに耐える力は夫人よりも強靱なはずで。ドラムランリツヒ伯爵の新婦について

とくに述べませんが、多々同情すべきことは勿論です。①

二、ドラムランリッヒ伯爵とリスボン大地震

隠棲する文学者ゲイにも愛され、長男急死の場にも居合わせた次男ダグラス・チャールズ(子)は、まもなく、ドラムランリッヒ伯爵家を相続し、上院議員の地位をも授けられた。しかし、不幸にも結核の病状が若き身に現れ、数名の従者とともにフルマウスから出航し、リスボンへ療養に來たのである。万聖節の朝彼は高台バイロ・アルトのカルモ修道院の近くに居合わせた。英国商館専属の医家スクラフトンの診察をそこで受けるためである。エドワード・ベイズによる前掲書には激震勃発の場面においては牧師ゴダールと同じくドラムランリッヒが描かれる。

バイロ・アルト地区ではドラムランリッヒ伯爵チャールズ・ダグラスが医院で椅子に座り、両親のクインズベリイ公爵夫妻に手紙を書いていた。そのとき彼は部屋の激しい震動に驚き、建物全体が揺れ始めるのを感じた。

① Mary Granville, Mrs. Delany, *op.cit.*, Volume III, pp.291-293.

ベイス著『神の怒りー一七五五年リスボン大地震』 ①

地震発生のうち実父クインズベリー公爵に宛てたドラムランリッヒ伯爵の書簡は、いまだ印行されていない。ベイスの書誌一覧によれば、グルセスタシエア古文書館には一七五五年十一月の六日付、八日付、十九日付書簡の三通が保存される。② 幸いにもこれらのうち八日付および十九日付手稿の複写が、大英図書館に所蔵され、これを入力した筆者は以下全文の試訳を別立として提示する。なお、ベイスの記述では万聖節の朝伯爵は医院の待合室にいたようであるが、この記述は六日付書簡に依拠すると思われる。

ドラムランリッヒ伯爵 十一月八日付書簡(その一)

テージョ河パケット船上にて、一七五五年十一月八日

敬愛する父上へ

奇蹟的な脱出からまもなく性急に、かつやや取り乱して綴った最初の書簡を、すでに受け取られたと念じています。しかし、私たい一同が大事に到らず、みな無事であるのをお伝えしたばかりは、突発した事態の経緯について僅かに述べただけでした。災厄の委細を知るべく父上が当然深く憂慮され、切に望まれると拝察し、襲いかかった出来事をできるだけ正しく報告することに着手します。ただし、それを完了する十分な

① Paice, *op.cit.*, pp., 58, 67-68.

② *Ibid.*, p.268.

時間が得られるまで、私はこの手紙を留置させるでしょう。自分の物語を始める前に確言したいのは、遭遇した苦難に打ちのめされたのではないこと、またいまは雨風や寒気を凌ぐ避難所であって、陸地で人々を脅かす苦難、たとえば悪党の跳梁や暴力沙汰から安全に護られていることです。暴力と書きましたが、食糧の欠乏という窮状のため、だれがどんな行動に走るか判りません。その朝十時頃私は座って、父上に手紙を書いていたのですが、部屋の激しい揺れに愕然としました。さして強まることなく、その震動は一分あまり続き、そのまま私は部屋にいます。しかし、家屋全体が端から端へ揺れるのに驚き、そこから飛び出して、隣室のアレックスと顔を合わせました。ふたりはたがいに腕を組んで支え合い、よろめきながら階段のところまで来ました。そこには地震に耐えうる石造の拱門があつて、建物の他の個所が崩れても、安全と考えたからです。階段に身を寄せる間に、私がいた部屋が凄まじい様相で倒壊し、戦慄した私たちは外へ駆け出し、家屋の崩れ落ちぬ戸外を見つけようと急ぎました。

しかし、外へ踏み出すや否や、近隣の建物がすべて瓦礫の山と化し、本来の街路を見分けるのが外国人には困難と判りました。とはいえ、鬼気迫る荒墟へ踏み込み、道を掘り分ける郷紳と、私たちは神慮により巡り合ったのです。そして、救うすべもない哀れな罹災者が瓦礫の下から悲鳴と悲嘆を発するのを背にして、ついに私たちは都心の大きな広場に辿り着き、建物の落石を免れるに至ります。そこに十二時頃まで留まる間に、最初の揺れほど強くないものの、さらに二度震動を感じました。その頃広場の一角に火の手が挙ります。人波が大きくなり、息詰まるような煙が昇るので、荒墟を越えて田野へ逃れようと決意しました。それこそ非常な難事であつて、もう倒れてしまふと思つたのですが、ダグラス君やアレックス君に支えられ、ついに安全なところへ来ました。①

ドラムランリツヒ伯爵が居合わせた医院は、英国商館専属の内科医リチャード・スクラフトンの自邸であつた。従僕とともに彼が逃れる背後で、その邸宅は倒壊した。スクラフトンも安否不明と一時伝えられたが、近郊ベルンへ避難し、多くの被災者にそこで治療を施した。

医院を脱出したドラムランリツヒ伯爵らは、広大なロシオ広場へと向かい、さらに高台のイギリス大使公邸を目指した。この経路についても十一月四日付書簡がより詳細と思われ、これを忠実に祖述したベイスの所論を用いる。

リチャード・ゴダールと同じように、ドラムランリツヒと従僕たちもこの都市では完全によそ者であり、まったく不案内であつた。しかし、逃げねばならぬ。スクラフトン博士の医院の残骸を前にして連る瀕なく立ち、なんらかの救援を待ったが、応急の措置はなにもみられない。倒壊した屋根に匍い登りかけたとき、イギリス人の時計師が現われた。ドラムランリツヒの名前と称号を彼に告げると、ロシオ広場まで迷路を辿って案内すると約束し、こうなれば一蓮托生ですと断言した。こうして瓦礫の下に生き埋めになった人々の悲鳴と哀願に終始追われつつ、彼らは世にも怖ろしい荒墟のなかで道を探し、普通なら十分の散歩で行ける

① Earl Drumlanrig of Charles Douglas, Letter to Duke of Queensbury, dated 8 November 1755.

距離に一時間も費やしてよたよたと進む。しかし、壮大なロシオ広場へついに到着し、その空地がせめて石造建築の倒壊からは護ってくれるように思われた。

ドラムランリツヒがロシオ広場で目撃した光景は、いま見てきた惨状と較べても衝撃的なものであった。広場には幾千もの人々が屯し、東、西、南へと通じる道路から幾千もの人々が入り込む。こうした光景を自宅から眺望して、毛織物商トマス・ジャコンフは書いている。「老いも若きも、男も女もあるいは親や子を捜し、あるいは親戚や友人を捜す。彼らの多くは病人のように蒼ざめ、建物の倒壊のため肢体の切断や負傷を蒙っている。すでに息絶えた者もあり、大半の女性が半裸なのである。」また、ほかの貿易商によれば、「極度の錯乱と苦悶から発する号泣が耳にしない凄惨な轟音に聞こえた。多くの者がみずから胸や顔を殴り、怪物のような頭部、幽鬼のような顔面に化したのである。」

それは宗教的な白熱または狂熱であつて、よそ者がかつて見たことのないものである。ドラムランリツヒは十字架に接吻するよう強制され、これを見たひとりの貿易商から、体力が戻ればすぐ狂気の沙汰から逃れるよう助言された。伯爵をはじめいかなるプロテスタントのよそ者も、恐怖を抱く充分の理由を持っていた。(異端者)とは容易に糾弾できる標的であった。リスボンでは一五三一年の地震のあと、新教徒に改宗したユダヤ人が民衆に襲撃され、近々一七二三年の疫病蔓延に際しては聖職者が貿易商を非難し、汝らの貪欲が神の怒りを招くと警告した。

ベイス著、前掲

①

① Paice, *op.cit.*, pp. 80-81.

ロシオ広場一帯では広大なサン・ドミンゴ教会から炎が昇り、不寛容の象徴ともいうべき異端審問所もまもなく炎上した。広場からドラムランリツヒが分け入ったサント・アンタオ門街は、十四世紀に旧市街の境界としてフェルナンドの市壁と市門が築かれた道路である。ここでもフランス系のサン・ルイズ教会や堅牢な第一監獄が破壊され、国際的な学者の旧居であるルリカル侯爵邸も燃え始めた。大地震に伴う大火について『世界地震通史』にはサン・ジョルジェ城の福祉施設など四つの火元が誌されているが、ドラムランリツヒはうちふたつ、サン・ドミンゴ教会とルリカル侯爵邸の出火を目撃したわけである。アヌンシア広場の一角を占めるこの豪邸は、サン・アンタオ門街の途中であるが、サンタ・マルタ街のイギリス大使館へは険しい坂道を登り、なお相当に遠い。ペイズの記述をさらに続ける。

ドラムランリツヒはロシオ広場からも離れる心構えをする。しばし休めるところへ案内されたので、親身な時計師に彼は過分の謝礼を与えた。それまでの難行でまだ身体は弱っていたが、狂躁のなかにもはや留まることが欲しない。ジョン・モリソン、秘書ダグラス、経理アレクサンダーなどの従者とともに彼は、サンタ・マルタ街のアブラハム・カステルス邸(イギリス大使館)を目指して、サント・アンタオ門街を歩み始めた。(中略)

首都から懸命に逃れる群衆に揉まれながら、ドラムランリツヒ卿とその一行はロシオ広場から北方向のカステルス邸へ徐々に進んだ。ルリサル侯爵邸へ通りかかると、突然その建物が炎上し、障害を越えて道を辿るのがきわめて困難となった。ダグラスやアレクサンダーなどの助けがなければ、そこで亡じたであろうと

ドラムランリッヒは信じる。とうとう彼らは瓦礫を掻き分け、オランダ大使ボスク・ド・ラ・カルメット殿と出会った。彼は家族および七、八人の従僕と一緒に、みな疲労困憊し、カステルスに身を寄せるつもりなのである。一マイル足らずの道程であるが、ロシオ広場を離れてから三時間経過した。そして、ついに彼らは大使館が構えているのを目にした。年配の大使は地震のとき二階の窓から跳び降りたが、具合を悪くした様子はなく、数を増す庭園の避難者に飲みものを配っていた。

ベイス著、前掲 ①

カストレスの公邸、イギリス大使館はフランシスココサント・マルタ尼僧院の近くに位置した。十六世紀に創建されたこの尼僧院も相当の被害を受け、修道女たちは裏庭のテント小屋に避難して修復を待った。② イギリス大使館では内部が破壊され、引き続き危険であったが、カストレスは脱出して無事であった。ここでは多数の被災者を受け入れ、多くは庭園で野宿する。以後カストレスの避難については十一月八日付書簡がより委細である。

ドラムランリッヒ伯爵 十一月八日付書簡（その二）

カルメット殿とご家族はみな憔悴しており、彼らを残して私たちはカステル氏の公邸へ向いました。

① Paice, *op.cit.*, pp. 94, 108-109.

② Francisco. *Ereira de Sousa. Efeitos do terremoto de 1755 nas construcções de Lisbon*. Lisboa. 1909. p.58-59.

裏手には広い庭園があり、そこなら救助と保護を得られると期待したからです。平常は一マイル足らずの道程ですが、障壁や瓦礫を避けてようやく三時頃に辿り着きました。さして激烈な震動ではなく、多少破損したものの、公邸は持ち堪えていました。庭園で私たちは飲みものと居場所を供されたのです。そこに留まっていた夜となり、閉め切った邸宅の一隅で敢えて眠るか、なんの覆いもなく、庭園で横臥するか、一同は応答を迫られました。私はと言えば、昼間は陽射しのため熱気を感じ、夜の十時頃には冷えてきたので、邸内で休むことに決めました。そこでも昼間ほど強烈ではないものの、夜間に幾度か余震を感じ、慌てて避難したのです。やはり邸内は避け、テントの下か、船の上で眠れるよう、苦慮しました。日曜の朝私たちは野宿の体制を整え、帆布と長竿でわが身を雨風から護るようになりました。しかし、夜間の非常な寒さと大勢の人々の叫喚に慄然として、火曜日の朝河畔に降りて、バケット船を呼び寄せました。求めに応じてその船は私たちを乗せ、そのまま港に停泊しています。いつまでそうしているか判りません。なぜなら、他のバケット船が到着するか、地中海から軍艦が戻るまで、出港が禁じられています。

ダグラス船長が地中海へ出航すれば、一緒に行くのが最善の方策で、日々彼に希望を寄せています。イタリアへ迂回する便宜を得られないと、イギリスへ直行せざるをえないのですが、この季節における気候の急変をできれば避けたいと思います。いずれにしても、いま身を置くバケット船で帰国するか、他の経路を選び、父上への便りをこの船に托すことになるでしょう。①

① Drumlanrig, *op.cit.*, pp.3-4.

大使館でドラムランリツヒ伯爵は、角材で支えた邸内で一夜泊まり、竿と帆布で造られた仮設小屋で昼は過した。しかし、大火に伴う灼熱と夜間の冷込みが大気を急変させ、持病である結核性の痰咳を悪化させる。なお余震が懸念される邸内から庭園に設けられたテントへ移った彼は、さらに停泊中のバケット船に入り込み、寒気と風雨を避け、寝場所を確保することとなった。

しかし、伯爵の容態は日増しに深刻となり、帰国船での疲労困憊は命に係わると周囲の人たちは憂慮する。イギリスの冬の寒さも避けるべきだ、とベレンから出向いた医家スクラフトンも助言した。②しかし、この時期に綴られた書簡には、やや落着きを取り戻したかのように、一般的な被災状況の報告も含まれる。

ドラムランリツヒ伯爵 十一月八日付書簡(その三)

最初の地震は五分あまり続き、震災の大半は劈頭生じたものです。それに続く火災がいまも燃えさかり、全市を余すところなく壊滅しました。大祭の日にあたるので、教会は信者で満ち溢れ、すべて最初の瞬間に倒壊しました。どれほど多数の人々が犠牲となったか、ご推察ください。王宮も完全に破壊されました。国王ご一家は首都から一里のところへ避難されました。この終日内閣は懸命の努力を続けて、生活物資の供給のため若干の規制を敷き、混乱のさなかに続発した怖るべき悪事の横行を断ち切りました。われらの商人数名は完全に破滅しました。高潮から金庫を護った人もいますが、ブラジル人宛イギリス商品をホルトガル人に委ねたため、艦隊の帰還までに支払を受け取れず、相当の負債を抱えており、先方が完全に破滅したため、

② Paice, *op.cit.*, pp. 125.

取り戻せない状況です。十二名を超える英国商館の人たちは幸いにも無事でしたが、みな住居は破壊されました。これまで乾いた天候が続いたものの、雨になったら避難民がどうすべきか判りません。地震は海上の船でも感知され、スペインでも発生したが、当地ほど強烈でなかったようです。今次の災厄についてきわめて不確かな報告を差し上げたかと懸念します。

大勢の人々が過度に申し立てるので、不確かな事柄を伝えたとしても、なにとぞお赦しください。一同が無事であることを神に感謝します。やや混んでいるが、適切な片隅でベッドに横臥し、衣類を脱ぐことすら、小さからぬ慰めであると申し上げます。多くの人はまだこうした楽しみに浸れません。衣類や敷布の大半は損われたのに、当面充分なだけそれらを掻き集め、事態がやや鎮静したいま私たちは、やや静穏である消えました。欲しい物をなんでも入手できるのです。機会を逃さず、私たちの知恵をお伝えしたいと思います。父上を敬愛する忠実な希望であることを確信して頂くため、これからも時間が許すかぎりお便りしたいと思います。

父上のもっとも忠実で従順な息子拜。 ①

ロンドンの定期刊行物『ホワイトホール・イヴニング・ポスト』は、一七一八年文学者ダニエル・デフォーによって創刊され、週三回、火曜、木曜、土曜に発行された。一七五五年十一月二五号でスペインの離宮エスクリアルにおける地震を報じた同紙は、つぎの十一月二七日号でフランス経由の通信としてリスボン被災の第一報を

① Drumlantig, *op.cit.*, pp. 4-5.

掲げた。その内容は主としてポルトガル駐在フランス大使バツシイの公文書に基づき、リスボン市街の壊滅と十万人の死者を伝え、国王一家の無事とスペイン大使の圧死を付記する。以後同紙では翌年春頃まで大地震に関する情報や証言が毎号収録され、十二月十一日には当地でラムランリツヒ伯爵と艱苦を共にする従者の書簡が掲載された。

ロンドン在住の友人に宛てたドラムランリツヒ伯爵従者の書簡

リスボン、一七五五年十一月八日

ドラムランリツヒ伯爵をはじめ、イギリスから出立した全員が無事であることを急ぎ報告し、みな頭髪ひとつ傷つかぬ僥倖を神に感謝致します。曝された危険の凄さは表現できません。目前に迫りる死を意識し、いまにも倒壊する建物に埋もれるかと震え続けました。これらすべてを地震が惹起し、都市リスボンで猛威を振い、ポルトガル王国全土を襲ったのです。全都が壊滅し、数千の住民が建物の下敷きとなりました。わが友よ！いかなる怖るべき出来事も、その凄惨な様相には及びません。一同無事の知らせがクインズベリー公爵ご夫妻へ届く以前に、災害の情報がロンドンで拡がることを危惧します。緊急の措置として船積みが禁止され、スペインまたはフランスを経由する通信のみ可能です。倒壊を免れた建物もすべて火災で焼尽し、リスボン全域が壊滅しました。大火は六日間続き、なお燃え続けています。昨日の夜と今日の朝またも強い地震があり、私たちはバケット船で寝泊まりしています。

巨大地震は十一月一日午前十時数分前に始まりました。僅かな時間を隔てて、ふたつの強烈な地震を感じました。全能であられる神から私たちは恵みを賜り、天慮によって危難を逃れました。さもなければ、みな荒墟で絶命したでしょう。ここではなお数千の不幸な人々が生き埋めとなり、左右のすぐ脇で息絶えつつあります。救うべき命と神は私を愛しましたのしよう。

地震のあと家屋からの煙幕でしばらく戸外が暗くなりました。震動が激烈であるとともに、住民の悲鳴も凄惨でした。脱出する私たちは荒墟に横たわる多数の遺体を踏み越えます。博愛と救いを求める数々の叫びに、立ち止まる者はなく、己の命を護るのに必死の有様です。大地はなお揺れ続き、徐々に軽減するものの、毎日震動を感じます。リスボンへの津波は二度三十フィート以上隆起し、大半の地域に氾濫しました。

英国商館も多大の被害を受け、貿易商らは帰国を急いでいます。地震発生時に着ていた衣類しか、大抵は所有しません。自宅から脱出する際に、数千の住民が死亡しました。狹隘な街路と高層の建物が密集し、空地に至るのが難しいのです。ドラムランリツヒ伯爵と私たち従者が命を繋げたのは、ささやかな拱道に一時身を寄せたからです。思い起こせば、凄惨な十一月一日土曜日、私の目は眩み、知性と感性は麻痺しました。善良なD君はだれよりも親身に伯爵を世話します。死ねば、神の定めと私たちは一緒に脱出を開始しました。しかし、狹隘な街路を疾走うちに、私は歩行障害に襲われ、連れを見失います。神護とも言うべくそのとき見知らぬ貴紳が現れ、英語で話しつつ私を連れのところまで送ってくれたのです。D君の求めでその貴紳は、さらに大きな広場（ロシオ広場）へみなを案内し、そこで四時間ほど座して避難しました。病身の伯爵も感嘆すべき気力を発揮されました。震動がやや弱まると、私たちは郊外の英国大使公邸へと道を辿ります。かなり破壊されたものの、公邸は倒壊を免れ、中庭で二晩野宿しました。そこでの五夜だれもベッドで寝ておりません。余震を懸念していまはバケット船上に泊まり、明日はどうなるか、だれも判りません。

こうして外来者が救われ、数千の現地民が歿したのも、奇妙に思われます。今朝もかなり強い余震があり、船上の全員がそれを感じました。英国商館に関連する死亡は、十人以下のようです。リスボンに住む現地民はすべて田野へ逃れました。①

ドラムランリッヒ伯爵自身は十一月十九日、ふたたびクインズベリー公爵宛に消息を書いた。さきの八日書簡であつて、これも闊達な活字体で書かれているが、用箋一枚強とやや短い。自身の現状について言葉が少ないのは、両親の心配を増したくないためでもあるろう。パケット船から大きな商船に所在を移し、毎日陸地に降りて目撃するのは、住民の惨状と犯罪の横行である。この書簡でドラムランリッヒ伯爵が訴えるのは、地震自体の脅威よりも為政者の無能と道義の紊乱である。

ドラムランリッヒ伯爵 十一月一九日付書簡

テージョ河イグナチウス船上にて、一七五五年十一月一九日

数日前にパケット船から一層大きな商船へ移動し、非常に大きな客室に身を置いています。

毎日陸へ登っていますが、そこでゆっくり横臥できないのは、さらなる地震で危険に瀕する懸念からではないのです。(破壊を免れた少数の家屋もあり)住居の破損が酷く、安心して休めないわけでは実際ありません。この国の人々は驚愕から幾分恢復し、頻繁な余震の続発にもさほど警戒せず、どの揺れでも第一日

① Whitehall Evening Post, No.1530. December 1755.

のような被害はありません。ようやく良識の回復が始つたと見られます。この被災国の支配者は数日間良識を完全に喪失し、そのため世にも怖ろしい狂瀾怒濤、いかなる国でも目撃したことのない惨状を惹き起すのです。迅速な指令、確乎とした統率、安全の確保が皆無でした。政府は保護する権力も処罰する権限も行使しません。人々の動転に付け入る厚顔で邪悪な精神だけがどの団体をも牛耳り、数日間恣しいままにあらゆる悪事がなされたのです。

イギリスから軍人が近いうちに来る予定があれば、軍艦の一艘に乗せて頂き、地中海へ迂回してもよいのです。これだけが私に残された唯一の方策であり、父上のご同意を得られれば幸いです。さもなければ、私の健康を考慮されたすべての友人の助言に逆らつて、パケット船でイギリスに帰るほかないのです。軍艦に乗るほうが、艱苦がすくないように思います。

イギリス、ハムブルグ、そしてイタリアが蒙った損失は莫大で得難いものですが、ひとりの富裕な商人が早くも巻き返しを開始しました。これまで直面した苦渋な状況のなかでも、事態の真相を知らされる毎に、自己の破滅をますます理解困難と感じる避難民のなかで生きることほど、凄惨な局面はありません。①

十一月二十日ウィリアム・クリエス船長はイギリスへのパケット船運航を許可された。乗客の第一陣は貿易商ベンジャミン・ファマーなど十七名で、いずれもリスボンに安住できず、前途も覚束ない人々であった。港に待

① Drumlaring, Letter to Duke of Queensbury, dated 19 November 1755. British Library, Egerton MS 3482,

機したドラムランリッヒ伯爵は乗客名簿から除かれ、一縷の望みは大英帝国の軍艦だけとなった。大陸諸国を牽制する海軍がときには地中海へ出動し、それに便乗すれば、スペインかイタリアへ上陸するのも可能である。①

十二月に入るとリッチ・ドリル船長と軍艦ベンザンス号に護衛され、イギリスの漁船団がカナダから到着する。船団に満載された大量の塩漬タラは野営する幾万もの人々に供される。だが、リスボン経由で地中海へ軍艦が出動する見込みはなお得られなかった。そのため大使カストレスの懇請を受けてドリル船長は、イギリスへ帰るベンザンス号にドラムランリッヒ伯爵を同乗させることに同意する。やはり同乗を許可されたアイルランド系在留民とともに、十二月十二日伯爵は護衛船二艘を伴うベンザンス号で一路祖国へ向った。②

三、大地震以後のクインズベリー公爵夫妻

スペイン駐在のイギリス大使ベンジャミン・キーンは、外交官としてカストレスの先輩、リスボンにおいては先任者である。一七四六年から一七四九年までポルトガルに駐在したキーンは、寛厚な人柄で在留民に信望が厚く、英国商館の幹部、とくに貿易商クリストファー・ヘイクと交誼を続けた。カストレスはもともと親密な友人のひとりであり、一九三三年に編纂された『ベンジャミン・キーン私的書簡集』では、カストレス宛の手紙が過半を占めている。この書簡集はイギリス近代史の貴重な史料と考えられるが、キーン宛ての手紙が残念ながら収

① Paice, *op.cit.*, pp. 144-145.

② *Ibid.*, pp. 155-156.

録されていない。

一七五五年一二月イギリスからクインズベリー公爵の書簡を受け取った。子息ドラムランリッヒ伯爵の艱難に苦悩する公爵は、軍艦による帰途イタリあるいはスペインに迂回する可能性を考え、大陸での支援を大使キーンに依頼した。現在この書簡は入手できないが、キーンの同月一九付カストレス宛書簡によって伯爵の帰国をめぐる状況を知ることができる。

ベンジャミン・キーン 一七五五年十二月十九日付書簡

マドリッド、一七五五年十二月十九日

アブラハム・カストレス殿

さきに今月二日付書簡を頂き、いま十一日付書簡を受け取りました。いつまたいかにして脅威が消えるかと、苦慮されるのも当然でしょう。丹誠にも友人たちの安否を知らせて頂きました。ご家族全員とともに奇蹟的に脱出されたタヴォラ侯爵を祝福し、その他生存者の方々にもお喜び申し上げます。震災の全体状況からすれば、在留民の犠牲者が少数であったことは、奇蹟のように思われますが、不幸にも伴侶を亡くされたヘイク殿へどのように弔意を伝えるべきか判りません。(中略)

憂鬱な手紙のひとつとして、クインズベリー公爵から書簡を頂きましたが、その文面を拝読し、いまだ落涙を押え切れません。事情はご存知かと思えます。ご子息の安否が判らぬまま、公爵は生存の希望でみずからを支え、郊外に住処を確保されたのです。この若い貴族に聞しては、あなたに下した推断を同じように抱

きます。かかる事態にかかる人物の音信が途絶えることを、多くの事例は示しています。彼があなたに宛てた手紙には、ふたつの称号が付され、公爵からお聞きしたその理由は、感銘深いものでした。(長男の急死という) 家庭的な不幸があつて、ドラムランリッヒ伯爵家を弟が相続したのです。カントレイ医学博士と一緒にいま彼が船上にいることを、私はクインズベリー公爵にお伝えします。ご息子が怖るべき惨憺たる状況から脱出できたか否かを、明らかに公爵は知らず、マドリッドへ寄る場合には、必要な支援が得られるよう、私に懇請されるのです。若きドラムランリッヒ伯爵に知らせてください。マドリッドに寄られる場合には、必要なものをすべてを提供するのみならず、私のもとや宮廷においてあらゆる歓待が用意される、と。遺憾にも公爵の書簡はビュロック船長による出航より遅く届きました。①

キーンのもとへは罹災に関する照会が相継ぐ。情報が得られぬか、あまりにも無惨な現実であるため、ほとんど回答できなかった。たとえば、銀行家ハルポイヌは地震のため発狂し、船上では鎖に繋がれ、故郷ヨークシニアでは番人に監視された。一七五六年一月ドラムランリッヒ伯爵はソールズベリーの城館へ帰り、クインズベリー公爵夫妻は随喜して愛し子を迎え入れた。かつて彼と戯れた文学者ゲイをはじめ、ブライア、ポウプ、スイフトなども世を去っていたが、六十歳に近い公爵夫妻はなお健在であった。しかし、震災の疲労困憊とイギリスの厳寒は結核に冒された身体にきわめて苛酷であった。帰国して十ヵ月後ドラムランリッヒ伯爵は逝去し、

① Benjamin Keene, *The Private Correspondence*, Cambridge, 1933, pp.442-444.

親子再会の幸せは束の間に消えた。①一八七六年に纏められた『ドラムランリッヒ城とダグラス家系』が四百頁以上の大著であつて、古城の由来、構造、所蔵とともに、歴代の城主や所領について細説されるが、クインズベリー公爵夫妻の夭折した息子ふたりについては、左記の叙述にとどまる。

ドラムランリッヒ伯爵ヘンリーは一七二二年十月三十日に出生し、一七五四年五月十日ホーフトウン伯爵の令嬢エリザベス・ホープと結婚したが、同年十月二十日みずからの拳銃で不慮の死を遂げた。また、一七二六年十一月十七日に誕生したチャールズは、一七四七年ドムフリス選出の議員に任ぜられ、その後実兄の急死によってドラムランリッヒ伯爵の爵位を相続した。(中略)

ドラムランリッヒ伯爵チャールズは療養のためリスボンに滞在し、大地震の際九死一生を得たが、イギリスへ帰国したのち、一七五六年十月に逝去した。

クラウフォード・Ｔ・ラメイジュ著『ドラムランリッヒ城とダグラス家系』(一八七六年) ②

長男の不慮の死に続いて、次男ドラムランリッヒ伯爵の夭折に世の同情は集っていた。しかし、ジョージ三世の即位とともに政界に返り咲いた公爵は、スコットランド大法官に就任し、さらに高等裁判所判事の地位をも占めた。一七六二年十二月クインズベリー公爵は近親の紹介でエジンバラ出身の青年と面会し、近衛連隊への就職

① Paice, *op.cit.*, pp. 156, 163.

② Craufurd Tat Ramage, *Drumlanrig Castle and the Douglases*, pp.55-56.

幹旋を依頼された。のちに大著『ジョンソン伝』を執筆し、奴隷貿易の廃止活動にも関与したジェイムズ・ボズウェルがこの青年である。就職運動は不首尾に終るが、公爵との面会についてボズウェルは『ロンドン日記』につきのとおりに誌す。

十二月二日木曜日。九時に公爵をお待ちした。彼はきわめて鄭重に私を迎えてくれた。大いなる人間愛と柔らかな物腰の人で、率直かつ的確な知性を持ち、身に受けた苛酷な打撃にもかかわらず、非常に快活である。職務を世話することは大変難しいと思うが、試みてみようかと公爵は私に申された。ほかにだれもいなかったが、喜ぶというよりもむしろ恥かしい思いをした。しかし、最初の面会であまり喋らぬほうがよいと考えた。だから長居はしなかった。

ジェイムズ・ボズウェル『ロンドン日記一七六二—一七六三年』 ①

同年五月フランスでは大著『エミール』が出版禁止の処分を受けるとともに、著者ジャン・ジャック・ルソーに逮捕状が発せられた。急拠スイスに亡命した彼を故郷ジュネーブも追撃し、ついにヌーシャテル州の寒村モチエへ避難する。一七六三年ヨーロッパ周遊に旅立ったボズウェルは、翌年モチエでルソーと会見し、さらにヴォルテールをも訪ねた。ふたりの思想家がリスボン大地震について叙述したことはよく知られているが、ボズウェルとの会見でこれを話題にしたか否かは不詳である。

① James Boswell, *London Journal 1762-1763*, London, 1951, pp.63-64.

一七六四年イギリス海軍の艦長ステア・ダグラスはカリブ海セント・キッツ島で十歳の黒人奴隷を購入し、親戚のクインズベリー公爵夫人に贈呈した。この少年ユリウス・スピーズは利発な素質を持ち、公爵夫人にわが子のように養育される。ロンドンで彼は乗馬とフェンシングの専門学校、アンジェロ学院へ入学し、校長の補佐を務めるまでになった。個人奴隷がイギリス貴族に育てられ、「黒い英国人」として名をなした事例には、モンターギュ公爵夫妻に庇護されて多くの作品や作曲を執筆し、奴隷貿易の廃止運動を推進した購入されイグナチウス・サンチヨが挙げられる。やがてスピーズは社交界のさまざまな会合に招かれ、ヴァイオリンの演奏や創作曲の歌唱でも評価を高めた。彼の芸術的才能と端正な容姿はクインズベリー家に集う上流夫人やそこで使える召使をも惹きつける。しかし、先輩サンチヨの忠告にもかかわらず、次第に彼の生活は放漫となり、アンジェロ学院からの解雇された。一七七七年クインズベリー家の召使に対する不祥事が発覚し、インドへ居を移し、そこで生計を見出す命じられる。

上演禁止から五十年の星霜を経て、一七七七年六月十九日ゲイの劇作『ポリイ』が、劇作家ジョージ・コーランによりロンドンで初演された。このとき客席に列するクインズベリー公爵夫人は、劇中の合唱に和してともに歌った。① スピーズがインドへ立ち去り、『ポリイ』が公演されてまもなく、キティは七七年の天寿を全うした。数々の挿話に輝き、老いてなお典雅で闊達な彼女であったが、死因はイチゴの食あたりとも、胸部の疾患とも伝えられる。②

① John Fuller, *Introduction*, in John Gay, *Dramatic Works*, Oxford, 1983, volume I, p.53.

② Julius Soubise, *Ignatius Sancho in 100 Great Black Britons*, www.100greatblackbritons.com

同じ時期にクインズベリー公爵はスコットランドの権能強化と経済発展に熱意を示した。グラスゴーとエジンバラを結ぶ水上運輸の要め、フォース・アンド・クライデ運河の建設は、彼を事業の会頭とし、土木工学の父ジョン・スミートンの主導によって一七六八年に開始された。一七七八年公爵は事故による脚部負傷の悪化で逝去し、その爵位は従弟ウィリアム・ダグラスに引き継がれる。十二年後五六キロに及ぶ運河が完成し、一八〇二年には最初の蒸気船も運航した。^①

^① Charles Douglas, 3rd Duke of Queensberry in on line *The Douglas Archive* . op. cit. Citizen of Edinburgh,

Thoughts on the intended navigable communication between the Firths of Forth and Clyde. In a letter to his

Grace the Duke of Queensberry, Edinburgh, 1768, pp.1-2, 26.